

## 24. 健康正常人の血中 CEA 値・及ぼす二、三・因子について

増岡 忠道 三本 重治  
(日本鋼管病院・アイソトープ)

京浜地区鉄鋼業従業員のなかから、健康正常人をえらび CEA リアキットで血中 CEA を測定した。対象者は全例男性で年齢分布は26~63歳で平均年齢は43.0歳である。121例の平均 CEA 値は  $2.70 \pm 1.39$  ng/ml で、2.5 ng/ml 以下は76例、62.8%であった。喫煙者の CEA 値は  $2.70 \pm 1.62$  ng/ml 非喫煙者では  $1.86 \pm 0.76$  ng/ml と両者の間に推計学的に有意な差が認められた。(t>0.05) 5.1 ng/ml 以上は全例喫煙者で、喫煙量による差は認められない。非喫煙群では各年代にわたってその平均値に差がないが喫煙者では30代 ( $2.31 \pm 1.34$  ng/ml) 40代 ( $2.70 \pm 1.55$  ng/ml) 50代以上 ( $3.19 \pm 1.60$  ng/ml) と加齢に従って血中 CEA 値の上昇傾向が認められた。牛乳を飲まない喫煙者・喫煙者毎日飲酒者はそれぞれ他のグループと比較して  $4.37$  ng/ml,  $4.03$  ng/ml と高値を示した。喫煙者67例を血液型で分類すると、B型 (3.6ng/ml), AB型 (3.28 ng/ml), A型 2.86 ng/ml O型 (2.2 ng/ml) と喫煙者の平均値よりもB型, AB型は高い。例数は少いが非喫煙でも同じ傾向が見られた。常習的喫煙が血中 CEA 値の上昇の一因であることが認められたが、喫煙だけではなく他の因子、アルコール、嗜好等の組み合わせにおいてどうなるかということについてもさらに今後検討する必要がある。

## 25. Radioimmunoassay による消化管ホルモンの検討

森山 昭子 村山 弘泰 岡本十二郎  
(東医大がんセンター・核医学)  
原田 容治  
(同・四内)

消化管ホルモンにおいては種々のホルモンをかね合わせて検討する必要がある、吾々は消化管ホ

ルモンであるガストリンについて、ダイナポット・CIS キットを対比させ各症例について検討すると共にセクレチンの Radioimmunoassay について検討した。

空腹時血中ガストリン値で胃癌群は他の消化器疾患に比較し高値を示しますが、バラツキが大きく疾患による特異性は認めない。

各疾患での低酸・無酸の比較では過酸群に比し低酸群は血中ガストリン値が高値を示し諸家の報告と一致した。

食事刺激では十二指腸潰瘍の血中ガストリン値の増加率が大いことは、胃液酸度を考えあわすと興味ある知見と思う。

セクレチンについては Boden の方法により two step 法 PH 6.4 phosphate buffer を使用して検討した。セクレチンは吸着しやすい特性があり、蛋白付加により吸着能を低下させるため付加蛋白濃度と吸着の関係を保つ濃度 0.5%, 1%, 1.5%, 2.5%, 3%, 3.5% について検討し、吸着率 4.3% を示した蛋白濃度 2.5% で実験を試みた。

血中セクレチン濃度を測定する上において pg/ml 単位のものが必要であるが、吾々の成績では ng/ml の標準曲線しか得られず種々の方面から検討試みている。

## 26. RIA 法による CEA 値の検討

木戸 晃 山田 英雄 末広 牧子  
飯尾 正宏

(養育院病院・核医学放)

三木 誠 大石 幸彦 上田 正山  
柳決 宗利 町田 豊平

(慈恵医大・泌尿器)

山岡 郁雄

(都立墨東病院・外)

One step sandwich method を用い、CEA を測定し、その臨床的価値を検討した。あわせてゲル法の測定値と比較した。

### 1. キットの安定性の検討

One step sandwich method におけるキットの安